

〔書評と紹介〕

『青森県史 資料編 近世3 津軽2 後期津軽領』

高野 信治

一

青森県関係の近世史料からは縁遠い仕事環境にある私に、本書の評者がつとまるのか不安だが、少ない経験ながらも自治体史編纂に携わりまた本書で扱われる藩政や領域社会の問題に関心を持つ立場から感想めいたものを述べさせていただくことでご海容願いたい。

二

本書は青森県史資料編七冊のうちの一冊で、弘前藩の成立から藩政確立までの動きを対象とした近世2前期津軽領の続編に当たり、前書の四章構成を継いでいる。ただし前書は、幕藩関係や藩政確立（第一章）、津軽平野の開発と村落（第二章）、弘前城下と湊町青森（第三章）、津軽九浦と海運や陸上交通（第四章）を扱っていることからうかがえるように、どちらかといえば主題別編成の性格が強い。これに対し、本書は「歴史の流れを読み取ることができるという性格のもの」（本書「はじめに」）をより目指したといえ、編集の苦労がしのばれる。具体的には

次の通りである。

「第五章 転換期の藩政と社会」は、宝永から天明期にいたる近世中期の藩政や社会状況を語る。大坂への廻米を機軸にした藩経済の全国市場への包摂にともなう財政窮乏が地域・民衆に与える影響や領主的対応の限界性が描かれ、天明飢饉などが天災というよりも人災的性格を色濃く持った様子が知られる。「第六章 北方問題の展開と藩政」は、北方問題の発生と寛政改革、また蝦夷地直轄化と弘前藩の関与や化政期の状況をうかがう。アイヌ民族蜂起や異国船来航に対応するため寛政期と文化文政期を中心とした蝦夷地警備や領内沿岸警備、またこの影響をうけた家中在宅や津軽家格上昇・黒石藩成立などの藩政の動向や領内状況の記録である。「第七章 諸産業の発達」は諸産業の有り様を示す。天明飢饉に際する農民救済としての杣取や漆・楮の増産計画、幕府の貿易対策もからみ銅生産に方針転換する尾太鉾山、藩献上品や長崎俵物の水産物や資源保護など意識した漁業政策、飯米確保と賦課金徴収のため藩の規制下にあった酒造業などの実態にふれ、幕藩権力との関係もみえてくる。「第八章 宗教の統制と民衆」は、宗教と藩政の関わりをなかで宗教者と民衆との関係や新たな信仰の発生もかいま見せる。真言宗を中核とした領内寺院統制や弘前熊野宮と同八幡宮の「両社家頭」による神堂・堂宮の統制、キリシタン類族、伊勢御師や神楽、信濃善光寺と遊行上人の弘前廻国、僧侶・神職の身分や上下支配関係また救済祈願など、民衆生活と深い関わりを持つ宗教の実態が浮かび上がる。「第九章 天保期の藩政と社会」は、天保飢饉の状況を民衆移動など社会全体との結びつきのなかで考えさせる。隠れ津出の禁止、「松前抹」や飢民の流出

入などに加え、貯米放出にともなう村方騒動、疾病、治安悪化と取締、献策など飢饉の具体的状況が知られ、追鯉^{おにんりょう}漁と年貢米売却による蝦夷地との経済関係などにも言及する。

本書は以上を物語る史料群で各章が編集され、近世後期の弘前藩領および松前蝦夷地や秋田藩領・南部藩領などの周辺地域との関わりも周到に視野に入れた、文字通りの歴史叙述が、各章解説と相まって史料自身によつて語られている。「地域からの視点と展望によつて」「領域における独自の歴史的枠組み」と「他の領域にみられない、北奥地方に普遍的かつ独自のテーマ」を、「歴史の流れ」に沿いながら検証する（はじめに）意図が成功している資料編といえよう。

本書から評者なりに注目したい点を、読み応えある解説も参考にしながら三点ほどあげたい。第一にいえば「民衆」の階層性が浮き彫りにされていることである。「民衆的船舶」「民衆的な商品取引」（解説五頁）などの表現には、「米持之族」（史料No.七八。以下七八のように表記）、「在方重立」（九六）、「在々身上者」（一二二）、「五所川原四ヶ村仲買之者」（四六五）などの地域社会での経済的・社会的有力者（評者はこのような存在を対馬藩を素材に「社会内権力」と呼称した〔拙稿「藩政と地域社会―給人地主制論の観点から、対馬藩を素材に―」〔『歴史学研究』七三三号、二〇〇〇年〕）や領主権力から身分的・政治的特権を与えられた階層（前掲拙稿では「対社会権力」と呼称）が想定されているが、彼らを含めた広い意味での民衆の階層性が、例えば打ちこわしの対象になるという局面だけではなく、その威嚇による徒党への強制参加や救米・貯米配分をめぐる米の下値買い集めと高値売りの風聞、松前出

漁にみられる特権性など、権力を介在させつつうかがえる。

第二に飢饉の実相・本質を考えさせられた。とくに「飢饉移出」という言葉に象徴されるように、全国市場へ依存せざるを得ない財政メカニズムが飢饉をいわば人災化している。しかも救済行為（とくに在方）そのものが窮民による城下殺到を防ぐ治安維持を目的としていたという指摘は（解説八頁）、領主による救済の意味を改めて考えさせられる。また「丹後者入込」の調査と「送返」（七七）が、岩木山の御神体が丹後の者に虐待された「さんせう太夫」の安寿という民間信仰に由来する事例は興味深い（七七。解説七頁）。丹後者による天候不順が信じられていたというが、かかる伝承・習俗を領主側は巧に取り入れて飢饉の本質から民衆の眼をそらせる意図も内在していたのであろうか。

第三に、長谷川成一氏の『近世国家と東北大名』を書評（『日本史研究』四五〇号、二〇〇〇年）させてもらった際にも感じたが、蝦夷地・松前との関係性が津軽地域の人々にとって重要であったことを再確認した。「松前控」は、領主側の規制にもかかわらず生きたるべきであったが、逆にアイヌ民族やロシア問題などによる、幕藩領主からはいわば外患が、津軽の人々に重い負担ともなった。そのような意味で、蝦夷地は津軽の人々にとって両義的意味合いをもっていたのだろう。

三

ところで県から市町レベルの自治体史編纂に多少なりとも関わった仕事から感じるのは、資料編の組み方の難しさである。現在評者が取り

組んでいる佐賀県と福岡市に關していえば、いずれも主題別編集の性格が強い。『佐賀県近世史料』は佐賀藩、三支藩、唐津藩、対馬藩、対外交渉、地方・町方、文学、宗教等の全十編、四十巻構成で刊行途上にある。同県の場合、四十年前程前に編纂された『佐賀県史』（全三冊）があるがこれは本編のみである。『佐賀県近世史料』編纂に關わる立場からいえば、史料の断片的採録はせず、しかも同一著者やテーマの関連史料の悉皆収集を心がけている。いわば細く長い編纂事業だからこそ可能なのであるが、歴史の動きは各編のなかで考慮されるものの、各編が総合化されて歴史の推移を検証した編集には必ずしもなっていない。

福岡市史も四十年前程前に編纂されているが、近代以降が中心で近世など前近代を含めた編纂は今回が初めてである。近世でいえば福岡市が旧城下町で中世からの国際都市博多の伝統も継承している点に鑑み、近世都市人やそれに関わりを持つ人々の姿を描くことをコンセプトとしている。ただ四巻構成の史料編は藩政、家臣、町と寺社、村と浦、というように主題別編成の性格が強い。収集資料を決める段階にあるが、可能な限り抄録は避ける予定である。

評者が現在取り組んでいる以上のような佐賀県・福岡市の史料編集の方針と本書は多少相違する。本書はある意味で大変に読みやすい史料編集である。それは歴史の流れを史料により語らしめる、という前記した方針が実現、成功しているからだ。ただかかる評者の立場からして気になることもある。例えば『佐賀県近世史料』は、当然のことながら伝本類の調査から底本決定、異本類情報を初めとする解題内容の充実を校合とともに重視している。福岡市史も細切れではなく、独立した資料編と

して「役立つ」ことを目指す。

本書解説のなかには、例えば一四一「寛政御仕向之覚」に關し写本間の異同などにも触れ、底本の不十分さを抄録ながら一四二「諸物価引下方一件」でおぎなう場合（解説一一頁）、また天保初めの藩財政を示す四八三「大都調」に關する異本間の検討も含めた成立年比定など、十分な史料検討もなされる（解説五九八頁）。しかし史料解題・検討がないものも少なからずあり、四三八「善光寺御用日記」に關する「天明二年（一七八二）の回國開帳の際の弘前藩御用懸役人による同元年からの御用留」（解説四九三頁）のような簡潔な解題が、例えば、一三「永祿日記」、七二「高岡靈驗記」、一七二・一七三典拠の「封内事实秘苑」「要記秘鑑」、四一九・四三三などの典拠史料として散見する「津輕編覽日記」などにも欲しかった。また五三「宝曆四甲戌歳御改帳之写」は弘前藩の財政帳簿の構造のなかでどのように位置づけられるのかという説明がないと本史料の理解も難しい、というような例もある。

このような事情から、本書は各章の解説説明に史料を落とし込むという印象をうけ、史料抄録の客観性も保障されにくいのではなからうか。しかし、繰り返すが資料編の編纂方針は難しくまた目指す方向により多様性は認められよう。本書は地域に即し史料に歴史を語らせる、その意味で十分に成功している資料編である。

（A4判、七二〇頁、青森県、二〇〇六年三月刊、価格五四六〇円）

（たかの・のぶはる 九州大学比較社会文化研究院教授）